

清瀬量平先生を偲んで

日本原子力研究開発機構理事長・東京大学名誉教授 鈴木篤之



恩師、清瀬量平先生は、平成 13 年 12 月に奥様がお亡くなりになられてから見るからにお力を落とされご家族も大変にご心配されていた時期がありましたが、気を取り直されケア付きマンションにてお元氣にお過ごしになられていたところ誤嚥性肺炎で、平成 22 年 7 月 6 日にご逝去されました。享年、83 歳でした。

先生は、そのお人柄から、多くの人に敬愛されていました。私は、不肖の弟子ながら、東京大学原子力工学科の先生の研究室を継がせていただきましたが、曲りなりにもその運営を全うしえたのは、ご退官後も、先生が築かれたご人脈を通してなど、先生から有形無形のお助けをいただいたおかげでした。

先生の研究室は、原子力化学工学講座と呼ばれていました。核燃料サイクル分野に広くまたがる工学的課題の研究教育を目的としており、広範すぎて雲をつかむようなところがありますが、先生は、それを見事にこなされました。

バックエンド部会の会員であれば、日刊工業新聞社から上梓された「原子力化学工学、第 I~IV 分冊」というシリーズものの教科書をご存知だと思います。同書は、1,000 ページ近くにも及ぶ有名な Nuclear Chemical

Engineering, 2nd ed. の翻訳ですが、先生は、正真正銘、お独りで完訳されました。核分裂炉の原理から説き起こし、それを発電炉として利用するために必要な核燃料サイクルのすべて、すなわち、ウランの精錬・転換・濃縮・加工、原子炉での燃焼、使用済み燃料の再処理、高レベル放射性廃棄物の処分に至る全工程を学問的に通観することは容易な作業ではありません。一人でこれらをすべてカバーすることは不可能と言ってもいいかもしれません。事実、原書は 3 人の学者の共著になっています。

先生から、それを翻訳するぞ、とうかがったときには、正直に申し上げて、まさかお一人では、と思いました。しかし、早朝の勤務時間外を翻訳に当てられることをいわば日課とされ、わずか 2 年程度で、見事にその難業を完遂されました。私は、先生のその真摯なご姿勢に、ただただ感服するばかりでした。

先生のご専門中のご専門は、なかでも、臨界安全でした。濃縮ウランやプルトニウムを核燃料サイクル工程で扱う場合には、臨界条件に達しないようにしなければならないにも拘わらず、原子力先進国の米国では、主として 50 年代から 60 年代にかけて、同種の核燃料施設で何回か深刻な事故を起こしていました。そのような米国の経験を熟知されていた先生は、日本においてその知見に学ぶことの重要性を見抜かれ、日本の臨界安全の基礎・基盤をほとんどお独りで築かれました。その後、わが国で JCO 臨界事故という痛ましい事故を経験したことは、先生のご努力を無にするもので、悔やんでも悔やみきれません。先生のためにも、二度と起こしてはならないと思います。

先生は、原子力の研究教育では、海外との交流が欠かせないことを、早くから説かれ、また、実践されていました。60 年代初期の米国アルゴンヌ原子炉研修コースでのご体験がその元になっていたようですが、大学の人間が海外出張することはそんなに簡単でないころから、毎年のようにお出かけになり、我々は先生のご帰国談をいつも楽しみにしていました。

先生は、したがって、海外にも多くの知己を得ていらっしゃいました。カリフォルニア大学バークレー校のピグフォード教授とアリゾナ大学のポスト教授は、いわば刎頸の友と呼べるほどの親しい仲でした。ピグフォード教授は、Nuclear Chemical Engineering の著者のお一人で、その困難な訳業を成し遂げられたエネルギーの源は教授との堅い約束だったにちがいません。また、同教授は、先生のお好きなテニスでは好敵手だったようです。ポスト教授は、バックエンド部会の会員には広く知られている、通称「ツーソン会議」と呼ばれていた毎春の Waste Management Congress の創始者です。同会議は、今でも、2,000 人以上の人が集まるほどで放射性廃棄物関係の最大の国際会議の一つになっています。また、同教授は、米国原子力学会の Nuclear Technology 誌の編集長として、アジア地域からの論文投稿の奨励を目的に、先生を同地域担当の副編集長とくに任命されました。

先生は、ピグフォード教授、ポスト教授とのご親交により、多くの日本人がバークレー校とアリゾナ大学に留学できるよう労をとられていました。わが国の放射性廃棄物処分手野で活躍されている人には、先生のお世話になった人が多いのではないのでしょうか。

先生の原子力研究や国際的交流への信念とも言えるご熱意は、終戦前の江田島での海軍兵学校でのご体験と無関係でないように思います。広島原爆投下は、日本を守るために青春を捧げられていた先生にとってあまりにも衝撃的だったにちがいません。善きにつけ悪きにつけ、米国の先端技術とくに原子力を学ばなければ日本の将来はないと、先生は、感じられたようです。終戦後は、東京大学の理学部物理学科に学ばれた後、学内で工学部に原子力工学科が設置されるとわかってから、早速、創設に関与されていた工学部化学工学科の矢木栄先生の研究室の門を叩かれ、先生の推薦もあって、発足とともに原子力工学科に席を移されました。先生は日本の原子力研究教育のまさに開拓者です。

我々は、先生のその崇高なお気持ちを忘れることなく、日本の原子力が健全かつ着実に進展するよう、力を合わせていければと、願うものです。

合掌。

(2010年11月)